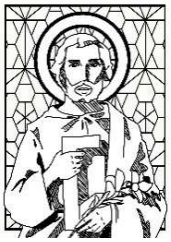
ともに歩む

6 号　2025 年 12 月 1 日　カトリック土崎教会
発行者：篠崎　エジルソン　c.tsuchizaki@gmail.com



労働者聖ヨセフ
土崎教会の保護聖人

～神様と、共同体と、日々の暮らしの中で～

【与える喜び】

クリスマスの季節になると、誰かのために贈り物を選ぶ時間が訪れます。しかし、なぜ私たちはこの時期にプレゼントを贈り合うのでしょうか。その源にあるのは、神がまず私たちに「最高の贈り物」として御子イエス・キリストを与えてくださったという出来事です。クリスマスとは、神が先に愛を与え、それに私たちが応えるという、愛の物語の中心にある日なのです。

この「与える喜び」というものを、私は自分の人生の中でどれほど味わってきただろうか――いただく喜び以上に、与える喜びこそ深いものなのだと、ふと考えることがあります。1989 年、私はまだ 6 歳でした。12 歳年上の姉が、一人でブラジルを離れ、日本へ出稼ぎに向かった年です。当時、私たちのコミュニケーションはほとんど手紙で、国際電話は高額でした。姉は「ブロッカー」と呼ばれる仲介人から多額の渡航費を借り、日本で働きながら返済していました。

1 年ほど経ち、姉がようやくその返済を完済した頃から、少しずつ生活に余裕が生まれていきました。それと同時に、電話は月一度となり、さらに誕生日・クリスマスの贈り物が届くようになりました。ブラジルでは見たこともないおもちゃばかりで、箱を開けるたび胸が高鳴りました。特に船便で届いたファミコンの喜びは忘れられません。遠く離れていても、姉の愛が届いたように感じました。

1997 年、両親と私は日本へ渡り、姉との再会という新しい「贈り物」を受け取りました。そのとき姉は妊娠 8 か月で、まもなく甥が誕生し、その神様からの贈り物、家族にさらに大きな喜びが加わりました。

やがて甥が成長し、今度は私が彼にプ

レゼントを贈る立場になりました。おもちゃや服をあげたり、ゲームセンターへ一緒に行ったり、マクドナルドに連れて行ったり、子どもの目が輝く瞬間を見る、そのすべてが私に深い幸せを与えたなと感じます。しかし、今振り返ると、甥に何を贈ったのか、具体的な品物はほとんど覚えていません。けれども、彼のことを思いながらプレゼントを探した時間、彼の喜ぶ顔を想像した瞬間、そして一緒に過ごした時間、これらは今も宝物のように心に残っています。与えた品物ではなく、「彼のために使った時間」こそが、私を豊かにしたのだと気づかされます。

神が私たちにイエスを与えてくださったように、私たちも愛のうちに誰かに与えるとき、そこに真の喜びが生まれます。キリスト信者にとって「与える」とは高価な物を贈ることではありません。私たちが持つ最も貴重なもの、それは「時間」です。なぜなら、時間は私たちの命そのものだからです。お金は働けば取り戻せても、使った時間は戻ってきません。だからこそ、病気の方を訪ねる時間、困っている人の話を最後まで聴く時間、誰かのために祈る時間、落ち込んでいる友のそばに静かに寄り添う時間、それらはすべて「自分の命をあなたに分かち合っています」という愛の行為です。イエスが教えられた「友のために命をささげる」という言葉は、こうした日々の小さな「時間のささげもの」にも深く当てはまります。

今年、誰かのために選ぶ一つの贈り物が、あなたの心にも神の愛の喜びを灯しますように。そして与える愛の中にこそ、神がともにおられることを深く感じられますように。

【共同体として迎えるクリスマス ― 年の終わりに感謝をささげて】

クリスマスは、家族が集う温かな季節であると同時に、私たち「信仰の家族」がひとつに結ばれる特別な時でもあります。幼児から高齢者まで、健康な人も病床にある人も、そして今はさまざまな事情で教会に来られない信徒の方々も含め、私たちは皆、神に招かれた同じ一つの共同体です。クリスマスに向かうこの季節、私たちは全員を心に抱きながら「共に祈り、共に祝う」ことの意味を改めて味わいたいと思います。

今年一年を振り返ると、私たちの共同体にとって、この上ない恵みの年であったことに気づかされます。何年ぶりかの幼児洗礼と堅信と子どもたちの初聖体。これら三

つの秘跡が同じ一年のうちに行われたことは、まさに神が豊かに恵みを注いでくださった「しるし」です。教会は「秘跡とは、目に見えない神の恵みを目に見えるかたちで示すもの」と教えます。つまり、今年私たちの共同体でこれほど多くの秘跡が祝われたという事実そのものが、神が確かに私たちの歩みに働いておられるという証拠なのです。

幼い子どもたちと入院している兄弟姉妹が洗礼を受けたこと、初聖体を迎えた子どもたち、堅信によって信仰を新たにした兄弟姉妹たち、彼らの姿は、共同体全体に新しい息吹を与えてくれました。また、病床で祈りをささげている方、仕事や家庭の事情でしばらく教会から離れている方々も、それぞれの場所で神の愛に包まれています。クリスマスとは、そうしたすべての人々を「ひとつの家族」として思い起こすときでもあります。

一年の終わりを迎える今、私たちはただ「うまくいったこと」に感謝するのではなく、試練や沈黙のときにも神がともにいてくださったことを思い返します。物事が思うように進まなかったとき、計画が立たなかったとき、心が折れそうになったとき、その中にも見えない導きが確かにありました。共同体の絆が深まり、祈りの力に気づき、奉仕の姿勢が少しずつ育ってきたのは、この一年の歩み全体が神の手の中にあったからです。

古くから教会で歌われてきた感謝の祈り「テ・デウム」、「神よ、あなたをたたえます」というこの祈りは、一年の恵みだけでなく、喜びも苦しみも含めたすべてを神に委ねる信仰の告白です。

今年も、クリスマスの光のもとで、私たち共同体のすべての歩みを神にささげましょう。そして、来たる一年も「ともに祈り、共に歩む」共同体として、主の導きと注がれている恵みを信じながら進んでいくことができますように。

【越境する歩み ― ふるさとを離れる人々と、エジプトへ向かった聖家族】

秋田に暮らしていると、ふるさとを離れて生活している多くの人々の存在を思い起こすことがあります。仕事、進学、家庭の事情、新しい挑戦、理由は様々ですが、新しい土地で生活するということは、大きな期待とともに、不安や寂しさも伴います。言葉が通じても、文化や価値観の違いに戸惑うこともあります。秋田を離れて暮らす人々、海外で働く人々、また秋田に来て新しい生活を始めている外国ルーツの方々。彼らの歩みは、勇気と忍耐、そして深い希

望に満ちています。

私たちはしばしば、「離れて暮らすこと」は現代社会特有の現象だと考えがちです。しかし、聖書を開くと、イエス自身が「ふるさとを離れて生きる」という経験から人生を始められたことに気づかされます。ヘロデの迫害を逃れるため、ヨセフとマリアは幼子イエスを連れてエジプトへ向かいました。見知らぬ土地、異なる文化、わずかな情報しかない中での生活。彼らの歩みには、現代の移住者や、ふるさとを離れて暮らす人々が抱く思いと通じるものがあります。

この出来事は、神の働きが「旅立ち」や「越境」の中にも確かに存在することを私たちに教えています。安心できる場を離れ、新しい土地で生きるということは、多くの挑戦を伴いますが、その歩みの中にも神は静かに寄り添い、導きを与えておられます。外国での生活が、聖家族にとって守られた時間であったように、私たちや周囲の人々の移住や旅立ちの歩みも、神のまなざしの中に置かれています。

秋田に来て暮らす海外ルーツの人々もまた、自分の文化や言葉を抱えながら新しい土地で日々を営んでいます。慣れない気候や食べ物、生活習慣の違い。それらはときに孤独を生むこともありますが、一方で、新しい友人や地域の優しさに支えられながら、自分の居場所を少しずつ見出していく歩みでもあります。土崎の共同体は、そのような「越境してきた人々」を受け入れる場であり続けたいと思います。

また、秋田を離れた人々は、新しい土地で出会う人々や経験を通して成長し、自分の人生を豊かに築いています。距離は離れていても、ふるさとを思う心はいつもどこかでつながっています。聖家族が母国を離れながらも、神の守りのうちに生きたように、ふるさとを離れたすべての人々の歩みもまた、見えない支えの中にあります。

エジプトへ向かった聖家族の物語は、私たちに静かに語りかけます。「どこにいても、神はあなたとともに歩んでいる」と。

この冬、ふるさとを離れて暮らす人々、異国で生活する人々、新しく秋田で暮らし始めた人々を思い起こし、祈りと優しさのうちに支え合うことができますように。

主の降誕、おめでとうございます。

2026 年が恵み豊かな一年となりますように。